



巻 頭 言

『物言う』教育相談学会への成長発展を願って

日本学校教育相談学会 宮城県支部副理事長 石川 健

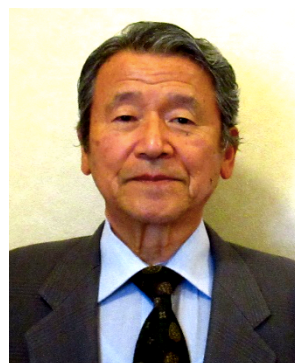
宮城県支部第53回研修会では、名古屋市経営アドバイザーの高原晋一先生をお迎えして「日本の学校は、どのように設計されているか～アメリカの学校教育及びスクールカウンセリングと対照して～」と題してアメリカの学校教育の様子と日本の学校教育の様子について比較しながらとてもわかりやすいお話をいただきました。

日本の教育が始まってから今までのいろいろな課題をアメリカの教育の流れと対照しながらわかりやすく話を進めてくださいましたが、その中でも、「アメリカには不登校は存在しない」と言い切った時には驚きました。「アメリカでは教育を受けることは一人ひとりの権利である。その権利がスムーズになされるために、国も自治体も全力を傾けねばならない。それ故、一人一人の子供に合った教育を授けてくれる学校を選ぶのは受ける側の権利である。もし子供の通っている学校に登校させたくないのであれば、親は裁判所に届けて承認を得なければならない」という話になった時には本当に驚きました。ただ、そのようになる前には、親は子供の通っている学校に行きスクールカウンセラーに、どうしてそのような考えに至ったのかを説明しなければならないとの事。そんなわけで、カウンセラーは学校に常勤していると事でした。このような考え方は『完全』なものは『神』以外にはない。『人間』は基本『エラー』を犯すもの。それ故、エラーを犯さないように学校は環境を子供向けに調整しなければならない。」という共通の教育観に立っているのも誰かが公的なサポートを受ける権利があり、そのためにも国や自治体は最全力でそれを応援しているのではないかと思います。

一方、「不登校」に対する私たち日本における意識や対応はどうでしょうか。

2024年11月1日付の河北新報に「不登校 宮城が全国最多」という見出しで今年も不登校の子供たちが多かったということが載っていました。2021年10月14日付の河北新報には同様の調査結果が「宮城の不登校児童生徒数はワースト8位」というタイトルで報道されていました。私は、3年前にこの記事を読んだ時、『不登校』はいじめや暴力行為と同列に悪い(ワースト)行為として語られて良いのだろうか」と河北新報「声の交差点」欄に問題提起したことがあります。(2021年10月30日付)。不登校の「ワースト」表現には、「不登校」一つとっても新聞社のみならず、世の中全体がマイナスイメージを抱いてみているように思えたからです。この指摘の翌年から今年までの記事には、不登校に対して「ワースト」という言葉は見られなくなり、「増加」とか「最も多い」とかという表現に変わったように思います。成長過程にある児童生徒たちへのマスコミ関係者の配慮が見られるようになったと嬉しく思っているのは私だけでしょうか。

高原先生のお話を聴いて私は、アメリカのカウンセラーは保護者が裁判所に申し出るのを補佐するのと同じように、「日本」の「カウンセリング」を専門とする『学会』も他の一般教育研修・研究会とは違った視点に立って、子供たちの権利を護っていく役割を担っていく必要があるのではないかと思います。今年は、私たちが所属している宮城支部は創立20周年を迎えます。そして、乙巳の歳。大きく脱皮して子供のために「世に物言う教育相談学会」に成長発展していこうではありませんか。



宮城支部設立20周年を迎え



「宮城支部20周年を迎えて」

宮城支部理事長 渡辺 美貴

会員の皆様にはますますご健勝のこととお喜び申し上げます。日頃より本会の活動に対し、深いご理解と温かいご協力をいただいておりますことに衷心より感謝申し上げます。

この度は、会報「きずな」第19号宮城支部20周年記念特集号の発行おめでとうございます。これまでの20年間の歩みを振り返り、その時々のご自身の教育相談への熱い思いを思い出しながらじっくりと読んでいただければ嬉しいです。

20年前、中学校は「荒れ」の真ただ中にありました。子どもたちが抱える苦しさや辛さ不安を、真っ向から教師に突き付け「何とかして！」と悲鳴を上げていたあの時代。それまでの「生徒指導」が崩壊し始めた時代。子どもたちの「悲鳴」を受け止め、その思いに寄り添うこと以外に為すすべがなかった時代。教師も一体どうすれば子どもや保護者の心に寄り添うことができるのかと悩み続けました。あの時代に私は志を同じくし、必死で子どもたちに寄り添おうと頑張っている仲間に出会いました。「一人じゃない！仲間がいる！」と思うことがどれだけ支えに力になったことか。この仲間たちと一緒に子どもたちのために学び続けたい。これが私の教育相談学会との出会いとなりました。初代理事長の川島克先生のご指導の下、「仲間と絆づくり」をコンセプトに日本学校教育相談学会宮城県支部は誕生しました。これまで実施されたすべての研修会、会報「きずな」、研究紀要「ふれあい」の中に「仲間と絆」の大切さがあふれ、改めて本会の存在価値と会員の皆様の高い志を感じております。

会報きずな19号の発行にご尽力いただいた、広報委員長千葉久美子先生と広報委員の皆様にご心より感謝を申し上げますと共に、会員の皆様のご活躍と、宮城県支部の更なる発展を心からお祈りしております。



「20周年を迎えて 私と教育相談学会」

宮城支部理事 鈴木 順子

私が教育相談学会に入会したのは、宮城支部を立ち上げたばかりの時でした。

初代理事長の川島先生から声を掛けていただき、保健室経営で様々な悩みを抱えていた私は迷うことなく仲間に入れていただきました。研修会にはできる限り参加するように心掛け、研修内容はもちろんですが、そこで出会った先生方と親しくさせていただき、困った時に、相談したり悩みを聞いてもらうことができたことが、私にとっては何よりも大きかったように思います。

中学校の勤務が長く、当時の中学生は不登校傾向の生徒よりも、授業離脱や問題行動等の多い生徒たちの対応が主でした。当時は授業（教室）にもどさなくてはいけない、私が甘やかすから保健室に集まってくるのか？等 自問自答の連続でした。それが教育相談学会に入って、先生方から話を聞いたり研修会に参加して、少しずつ私自身に変化が現れて、子どもたちへ余裕を持って接することができるようになっていくと、一人一人の子どもたちの話に耳を傾けることができるようになっていきました。そうすると、子どもたちも授業に戻ることも多くなってきました。担任の先生方と保健室での対応について共有もでき、担任はこんな声掛けやアプローチをするので、保健室ではこんなサポートをお願いします等と話ができるようになっていきました。学年（担任）と保健室がうまく連携をとることで、子どもたちの変容が見られるようになっていき、私自身の気持ちに余裕が生まれ好循環になっていったように思います。

最近若い先生方の入会が少ないのはさみしい限りです。ぜひ多くの皆さんに教育相談学会の良さを知ってもらい仲間が増えることを願っています。



「出会いから」

宮城支部副理事長 神田 裕樹

平成22年頃と記憶しているが特別支援教育センターに勤務していた時に丸森町での研修会で発達障害のことについて話をさせていただいたことがある。その際に現副理事長である中里先生に出会い教育相談学会が開催している研修会への御案内をいただいた。当時、障害のある児童生徒の教育相談業務に携わっていて、不安や時に怒りを抱えて来所する保護者への対応に戸惑いを感じていたこともあり、本会の準会員となり様々な研修会に参加させていただいた。雑誌や本で見聞きする県内外講師の研修会もあり、お得感を感じながら参加をさせていただいていた。研修会では会員の先生方からお茶やお菓子を勧められ、和やかな雰囲気が研修会場にあるのいいなと思っていた。気が付けば出会いから15年が経過し、会の理事等も経験させていただき仕事の方では3年前に定年を迎えた。これからも現職の先生方や子供に関わる方々にとってお得な会でありたい。

「宮城支部20周年を迎えて思うこと」

宮城支部理事・事務局長 高橋 豊

私と教育相談との出会いは、初任2校目の中学校に勤務している時でした。当時の中学校は、生徒たちの心の不満の多くが、服装の乱れや喫煙、器物破損、他人への暴力等の形で表れ、管内でも生徒指導困難と呼ばれる学校が複数あり、「力の生徒指導」が主流の時代でした。私も当時は、校則違反をする生徒の表面だけを見て指導を行っていました。益々生徒は荒れ、不登校生徒は激増し、初めて「力の生徒指導」は通用しないということに気がきました。「なぜそのような行動をとるのか。その心の状態はどうなっているのか。」生徒の内面を深く理解するために、日本学校教育相談学会宮城県支部に入会させていただき、教育相談の理論を学び、カウンセリング技術を高めるために、様々な研修に参加しました。そして、私自身が「力の生徒指導」ではなく「教育相談的生徒指導」が少しずつ行えるようになり、私の言葉も生徒の心に届くようになって行きました。しかし今、SCが全校配置になり強く懸念していることは、「SCに繋がればそれで安心」という教師が増え、教師自身が教育相談を学ばなくなっているように感じることです。実際、宮城県支部の会員数は年々減少し、特に若い教師の会員の割合が著しく低下しています。日常最も多く児童生徒に関わらなければならない教師が、教育相談を学んでいない現状があります。宮城県の不登校率が一向に減少しないのも、その当たりにも原因があるような気がしてなりません。令和4年12月に、生徒指導提要在が改訂され、その中で改めて教育相談の重要性が示され、教育相談を中核とした生徒指導を展開していくことが求められています。だからこそ、教師、特に若い教師がもっと教育相談を学んで、カウンセリング技術を身に付け、児童生徒との心と心の絆づくりができる教師が増えてほしいと願ってやみません。

各委員会より

◇◇◇研修委員会◇◇◇

委員長 神田 裕樹

多くの学校では、学習発表会や総体といった行事がコロナ禍の前のように実施することができるようになりました。お陰様で本支部の総会や研修会等につきましても対面での実施ができました。また、オンラインとの併用、ハイブリットで実施し、参加しやすくなったと感じている方もいらっしゃるのではないかと思います。研修会については、なるべくスムーズな運営を行っていきたいところですが、参加費の徴収につきましては、参加をキャンセルした方に返金をする際に、返金をする金額と手数料を併せて支出し、返金のための手数も多く掛かってしまうことが昨年度の反省点として挙げられました。今年度は会場にて直接徴収させていただく方法に変更させていただいたことに御理解をいただきたいと思います。今年度は以下のような研修内容となり、久しぶりに100名を超える御参加をいただいた研修会もありました。これからも会員相互の学びを深めて参りたいと思います。研修会の内容等に付きまして積極的に御意見等いただければと思います。

○令和6年度支部研究・事例発表会

期 日：令和6年8月31日（土）10：00～12：00

会 場：東北福祉大学仙台東口キャンパス

内容等：事例発表

岡 智恵子先生（東北福祉大 大学院）

「小学校の校内支援室における発達障害児の社会性獲得プロセス」

菅原 由美先生（東北福祉大 大学院）

「年度途中に休職した担任の学級を引き継ぐ教員はどのような役割を担うのか」

○第52回研修会（対面とオンラインで実施）

期 日：令和6年8月31日（土）13：30～16：30

会 場：東北福祉大学仙台東口キャンパス

内容等：坂本 條樹先生（共立女子大学家政学部児童学科 講師）

学級担任・教育相談担当者が知っておきたい WISC-Vの基礎知識

～子供の何が分かって、どう授業・指導に生かせるのか～

○第53回研修会（対面とオンラインで実施）

期 日：令和6年11月30日（土）9：30～16：30

会 場：東北福祉大学仙台東口キャンパス

内容等：高原 晋一先生（名古屋市経営アドバイザー Ph.D）

日本の学校教育はどのように設計されているか

～アメリカの学校教育およびスクールカウンセリングと対照して～



◆◆◆広報委員会◆◆◆

委員長 千葉 久美子

広報委員の皆様のご尽力により、会報「きずな」を発行しており、このたび19号の「きずな」をお手元にお届けすることができました。この第19号は石巻ブロックの高橋 憂季実さんを中心に、宮城支部20周年を迎え、発足時のご苦労やこれまでの歩みをまとめた紙面になりました。発足時の熱い思いを受け継いでいきたいと思いました。石巻ブロックの皆様衷心より感謝申し上げます。

この会報はタイトルのとおり、会員相互のきずなをより深め、研修や情報交換の場になれるよう広報委員会が心を合わせて、魅力ある紙面を作っていきたいと思います。また、公私ともにご多忙の中、快く原稿をお引き受けいただきました会員の皆様に改めて御礼申し上げます。なお、19号以降の担当は以下ようになります。

◇第20号・・・担当：仙台ブロック

◇第21号・・・担当：大河原ブロック

◇第22号・・・担当：大崎ブロック

◇第23号・・・担当：石巻ブロック

◆◆◆紀要作成委員会◆◆◆

委員長 中里 和裕

紀要作成委員会の仕事は、研究紀要「ふれあい」の作成です。一昨年度に12年振りの発刊となった「ふれあい」第8号は事務局の全面的な協力により作成されましたが、昨年度は改めて紀要作成委員会が中心となり、「ふれあい」第9号を発刊することができました。

第9号の発刊に当たり、昨今のインターネットをはじめとするICTの普及状況を鑑みて、これまで紙面でお届けしてきた研究紀要「ふれあい」を、今後は支部ホームページにWEB版として掲載させていただくことになりましたことをご報告いたします。インターネット環境があればいつでもどこでも必要ときに開いて見ることができる、新しいWEB版研究紀要「ふれあい」を、これからもどうぞよろしく願いいたします。

ところで、研究紀要は「研修・研究成果の整理・蓄積・保管」の場としての役割を果たしています（日本学校教育相談学会宮城県支部会則第20条）が、また、一方で支部会員による本学会認定の「学校カウンセラー」資格取得促進のための役割も有しています。「学校カウンセラー」資格は、取得すれば日本スクールカウンセリング推進協議会が認定する「ガイダンスカウンセラー」資格取得のための基礎資格にもなり、また、本学会の主催する研究大会・夏季ワークショップや中央研修会等の参加に当たっては、参加費の優遇措置も受けることができます。資格申請に当たっては、「相談研究実績」として、「本

学会研究大会、または市町村以上の他学会や研究会においての紙上発表や口頭発表等を行った実績」が必要となりますが、研究紀要はこの「紙上発表」の場として御活用いただけます。

つきましては、第10号の発刊に際しましても広く支部会員の皆様に研究発表・実践事例の寄稿をお願いしたいと思います。特に「学校カウンセラー」資格取得を目指す会員の皆様の積極的な寄稿をお待ちしています。どうぞよろしくお願いいたします。

各地区ブロックよ

◆◆◆仙台ブロック◆◆◆

今年度、仙台ブロックでは、令和7年1月11日（土）に東北福祉大学国見キャンパスを会場として、ブロック会議と研修会を開催しました。今回は研修会の様子を御報告いたします。研修会の講師として東北医科薬科大学病院 精神科病院准教授（公益社団法人宮城県精神保健福祉協会 みやぎ心のケアセンター センター長）の福地 成先生をお迎えし、「自分を大切にできない子どもたちを理解するために」と題して御講演をいただきました。「集団の健康課題への考え方のヒントをつかむ」という研修の目的のもとで、大人になったときの健康リスクに関係することが報告されている小児期逆境体験（ACEs:Adverse Childhood Experiences）や自傷行為の背景、面接時に注意すべき言葉掛けやトラウマ・インフォームド・ケアについて、福地先生が対応された実際の事例などを交えながらわかりやすく御説明いただきました。参加者の先生方からは「“自傷行為の背景”については現場で思いあたる事が多く、納得感をもって聞くことができた」「児童を取り巻く環境づくりや未然に防ぐ方法を考えてつくっていかねばならないと考えた」などの御感想が寄せられ、今回の研修をとおして各先生方が課題を抱えた児童生徒へのより適切なアプローチの手法を学ぶとともに、課題を解決するために働き掛けるべき場所を考えるという新たな視点を得ることができたのではないかと思います。大変お忙しい中、御講演をいただいた福地先生にこの場を借りて深く御礼申し上げます。また、今回の研修会には、県内各地からブロックの枠を越えて多数の先生方に御参加いただきました。今後も先生方からの御要望を取り入れたブロック研修会の実施と志を同じくする先生方のネットワークの構築に努めて参りたいと思います。

仙台ブロック幹事 村上 誠



◆◆◆石巻ブロック◆◆◆

石巻ブロックでは、6月にブロック会議（茶話会）を実施いたしました。「各自が感じている教育現場の課題について—教育相談の視点から—」というテーマで、本会員の千葉久美子先生の御自宅の中にある書道教室を会場に歓談をしながら、情報交換を行いました。コロナ禍を経て、久しぶりに参集型のブロック活動でした。時間がいくらあっても足りないほどに、それぞれのキャリアステージから見えている教育相談の現状について語り合いました。

学校現場の多忙が児童生徒のみならず、教職員のメンタルヘルスにも大きな影響を与えていることを憂う声も多く、指導法改善を目的とした働き方改革の難しさも話題となりました。学び合う教職員チームであるのかどうか、その関係性に大きく左右されます。それは「ガチャ」と呼ばれ、時の運に委ねられることが多いのが現状です。そこに、教育相談の知見をもった先生がいらっしゃるのであればよいのですが、「生徒指導提要」というワードさえ聞いたことがない

石巻ブロック幹事 藤坂 雄一



現場もあります。頑張れば頑張るほどに、指導困難な学級を担当することになったり、校務分掌の不公平感を感じたりする現状も。加えて、納得できない職員評価によって、不信感や意欲低下を招いている声も耳にします。「ウェルビーイング」が今後の教育界でもキーワードになっていくというのに、なんとも悲惨な現状は教職希望の低さからも感じ取ることができます。

とはいえ、未来に向けてブロックの活動を少しずつ再開していこうと確認する場となったことは嬉しいことです。志を同じくする仲間と学び合うことこそ、「ウェルビーイング」を実現する働き方であり、教育実践者としてのあり方であるのではないかと考えています。語り合うことで、エンパワーされた時間となりました。困り感を抱いている現場の先生方を支える場に、今後は発展しながら開催していきたいものです。

◇◇◇大崎ブロック◇◇◇

大崎ブロック幹事 鈴木 宏子

大崎ブロックでは、6月にブロック理事会・研修会を開きました。昨年度に公開の研修会を行いましたので、今年度は新しい会員の方も交えてお互いの親交を深めながら大崎ブロックとしての課題やテーマを考えていくことになりました。そこで7月に自己紹介を兼ねて歓迎昼食会を行いました。11月には事例検討会を開き、それぞれの現場での課題や気になっていることを出し合いました。共通点として浮かび上がってきたことは『子ども同士の関わり合う力が弱くなってきている』のではないかとのことでした。休日に友達の家に行き、初めての友達と同じ時間を過ごしてもあいさつもなく言葉も交わさず帰ってくるという子どもたちの姿。それを当然と思っている様子が話題に出されました。スマホやパソコンという個で楽しめる世界があり、関わり合う力を身に付けないまま、さらにはそれに違和感を持たず成長している児童生徒のことが話題になりました。短い時間ではありましたが充実した時間でした。さらに2月には送別昼食会を開くことを約束し、その時にまた検討することにしました。コロナが落ち着き、このように直接話しながら事例の検討をすることができることに喜びを感じた一年でした。来年度も現場の先生方に寄り添った研修ができるように計画していきたいと考えています。



◇◇◇大河原ブロック◇◇◇

大河原ブロック幹事 阿部 裕美

2月15日（土）に大河原ブロック研修会を行いました。年度末のお忙しい時期にも関わらず、会員の中里和裕先生（仙台大学体育科こども運動教育学科教授）が快く講師を引き受けてくださり、ブロック顔合わせ後に、不登校支援に関わる研修会を開催することができました。

「担任とチームで取り組む児童生徒支援～不登校生徒と保護者のそれぞれの歩みを進めるために～」と題して、たくさんの資料をご準備いただき、子供たちの捉え方、教師に求められる姿勢、「学級」をどう捉えるか、児童生徒を理解するために学ぶべきこと、発達障害の理解と対応、児童生徒と保護者支援の実際について事例を挙げながら、教育相談の技法等も交えてわかりやすく教えていただきました。

ブロック会員8名、他ブロックから1名、会員以外の先生方3名にもご参加いただきました。中には、次年度からの新規採用に備えて、不登校支援について学んでおきたいと、自らこの研修会を探し当てて参加して下さった講師の先生もいらっしゃいました。皆で感激し、この教育相談学会の意義を改めて感じました。

講演後には、理事長の渡辺美貴先生から、宮城県支部発足の経緯をお話いただき、発足当時の先生方の熱い思いも知ることができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。

子供たちや保護者の方々がそれぞれの歩みを進められるよう、どのような支援や関わりが必要か共に考え学び合うために、会員同士のつながりが何より大切との思いから、来年度は気軽に集まり近況報告をする会を開催する計画もできました。今後も支部ブロックのつながりを感じる機会が持てるよう、先輩方にお力添えいただきながら進めて参りたいと思います。

令和6年度支部研修報告

「令和6年度支部研究・事例発表会」

東北学院大学 高橋 晃子

令和6年度の支部研究・事例発表は、東北福祉大学通信制大学院福祉心理学専攻の2名の発表でした。お二人は同大学中村恵子先生のご指導のもと研究をなさっています。

「校内支援室における発達障害児の社会性獲得プロセス」岡智恵子先生（元小学校教諭）

不登校の児童生徒数は年々増加傾向にあり、不登校の要因に発達障害に起因する事例も見受けられます。宮城県では2020年4月より不登校等学び支援教室支援事業が開始されました。岡先生の発表は不登校を経て再登校を始めた発達障害児が校内支援室での小集団で社会性を獲得するプロセスが手に取るようにわかる事例でした。

「年度途中で休職した担任の学級を引き継ぐ教員はどのような役割を担うのか」菅原由美先生（元小学校教諭）

近年、教育職員の精神疾患による病気休職者数が増加傾向にあり、菅原先生は小学校において、年度途中で精神疾患などで休職した担任の代わりに学級経営を引き継いだ教員が、どのような役割を担うのかを明らかにし、その役割遂行を阻害あるいは促進する要因を究明する目的の研究をなされています。研究協力者に対して半構造化面接によるインタビュー調査を行い、KJ法により分析し、記述化・ラベル化し、統合化し考察しています。今回の発表会では5例の分析のうち1例の分析過程を中間報告として発表していただきました。

「研修会に参加して」

大崎ブロック 末永 祐子

特別支援教育の専門家である坂本先生の研修会。昨年も坂本先生の研修で「発達障害のある子を対象とした通級指導教室での取り組み」に参加しました。話は分かりやすく冗談を交えながら面白くあっという間に時間が過ぎてしまいました。今回も坂本先生ということで楽しみにしながら研修に参加しました。今回は「学級担任・教育相談担当が知っておきたいWISC-Vの基礎知識」という内容でした。

私が教育相談学会に入会した頃は、研修会にはいつもたくさんの先生方が参加していましたが、だんだん参加する先生方が少なくなり寂しく思っていました。今回のテーマが先生方のニーズに合っていたのか会場いっぱい先生方が参加していました。今、学校現場で発達障害の児童・生徒が多いことや検査結果の読み取り方や結果からどのように指導して生かしていいか分からないなどの悩みを抱えていることが参加人数に反映しているように思いました。WISC-Vに現れる困難さと学業の困難さの関連について各指標ごとに困難さに見られる特徴や支援方法について具体例が示されておりとても分かりやすい内容でした。また、知能検査資料を読み解くための手順も説明していただきました。さらに、数値だけでなく普段の児童・生徒の学習や行動の様子を加味すると実効性が高まることなど、たくさんのことを学ぶことができました。研修会に参加することは自分磨きだと思っているので、今後もできるだけ参加したいと思います。

「11月30日研修報告」

東北学院大学 人間科学部 心理行動科学科 高橋晃子

令和6年11月30日（土）東北福祉大学仙台駅東口キャンパスを会場に、宮城県支部第53回研修会が行われました。当日は、集合型とオンラインを兼ねたハイブリット開催でした。高原晋一先生（名古屋市経営アドバイザー、Ph.D）を講師に「日本の学校教育は、どのように設計されているか～アメリカの学校教育およびスクールカウンセリングと対照して～」と題して、午前と午後の1日研修でした。午前中は、明治以降の日本の学校教育制度について、フランスの学校教育や儒教（中国の荀子など）からどのように影響を受けてきたのかを学びました。さらに、アメリカやオランダ、フィンランドなどの教育の実践について、写真なども交えて具体的に知ることができました。何が「最良の実践（best practice）」なのか、「主体的・対話的な深



い学び」の本当の意味など、欧米と日本（特に文科省）の解釈の違いなど、日本の学校教育が対比によってよくわかりました。午後からは、日本とアメリカの形だけの比較ではなく、どのような発想（人間観）によって教育がなされているのかを考えることができました。アメリカの学校教育に関する基本的情報、教育機関の説明と、学校生活の様子（授業風景やランチルームや子どもたちの通学風景など）がスライド写真で多数紹介されました。最後に、アメリカのスクールカウンセラーの活動についてその歴史と現在の役割・機能について紹介していただきました。日本のスクールカウンセリングと決定的に違うこととして「問題」への対応ではなく、「第一次予防」に重きを置くことが印象に残りました。研修時間は6時間に及び、後半はグループごとのディスカッションの時間もあり、とても充実した研修会となりました。

「学校カウンセラー部会活動報告」

神田 裕樹

年間を通して1回の活動ではありますが、13名の会員の皆様に御参加いただき下記のとおり総会並びに研修会を開催することができました。

開催にあたり、事務局で事例の提供を参加者の皆様に依頼したところ、小山内先生から貴重な事例の提供をいただきました。事例についての詳細は割愛させていただきますが参加者の皆様から様々な意見が寄せられ事例に対する多面的な見方ができました。また、中村恵子先生からは脳科学的な見地から昼夜逆転、睡眠についての知見をお聞きすることができ短時間ではありますが充実した研修の機会となりました。

○令和6年度第8回総会、研修会

期 日：令和6年11月9日（土）13：30～15：30

会 場：東北福祉大学国見キャンパス

内容等：カウンセラー部会総会

（1）報告 ・支部所属学校カウンセラー有資格者数

・活動内容、部会役員、事業報告他

（2）研修 ・事例検討（事例提供 小山内正輸論先生）

スパーバイザー 東北福祉大学 教授 中村 恵子先生

コラム「研究室」か



「学生たちが支援職として育ちますように」

東北福祉大学教授 中村恵子

中村恵子ゼミは、多賀城市教育委員会と連携協定を結ばせていただき、不登校の児童生徒の適応支援ボランティアをしています。市教委が学生たちの交通費を予算化してくれ、これに対し私が学生たちに適応支援の方法を教育するという交換条件の協定です。

そこで、1年の終わりのゼミ紹介では、1週1日午前の授業を空けてボランティアに充ててほしいこと、春休みの間に発達障害や神経症など1人1題の課題があてがわれ、3年生の指導を受けて4月に発表すること、年間12週のボラ実践で、その日のうちに支援記録を提出して翌日の支援との切れ目をつくらないこと、3回実践したらゼミで指導を受けることなどを伝え、その大変さに希望者が急激に少なくなっていくのが毎年の恒例です（汗）。それでも集まってくれる学生たちの熱量はいつも高いので、やがて彼らが支援職として育ち、子供支援の裾野が広がってくれる未来を楽しみにゼミを運営しています。

「研究室から」

仙台大学教授 中里 和裕

昨年3月、役職定年を機に38年勤めた宮城県公立学校教員の職を辞し、ご縁があって4月より仙台大学に教員として入職することになりました。

大学に勤めるようになって一番感じていることは、これまで勤めてきた小・中学校の児童生徒と比較して、大学の学生には教育の場におけるコミュニケーションの機会と場が圧倒的に不足しているということです。このことについては高等学校もまた同様であり、私はこのような現状が子供たちのコミュニ

ケーション能力を育成するうえでの「ミッシングリンク」になっていると感じています。今後はこの状況も踏まえながら、これまで学校現場で積み重ねてきた研究・実践の成果を基に、「共生社会の実現に資する包括的かつ包摂的な教育システムの構築についての研究」に取り組んでいきたいと考えています。

「研究室から」

宮城学院女子大学健康教育専攻准教授 千葉 久美子

宮城学院女子大学の健康教育専攻は、養護教諭・保健体育教諭を養成する学科です。私はこの学科で5年前から、「養護実践学」「健康相談」「救急看護法」などを担当し、実際の学校臨床と理論を統合させる授業を行っています。「養護教諭になるのが夢!」と目を輝かやかせて授業を受ける学生がほとんどなので、いつも緊張感マックスで、ドキドキしながら授業を行っています。多くの学生は憧れの養護教諭に出会ったことで、自分の夢を見つけて、今に至っています。養護教諭という仕事はそんな夢を与える仕事だと実感する日々です。



千葉ゼミの卒業生と一緒に

研究論文紹介

「今回の研究論文」

宮城県支部理事 麻喜 総一郎

執筆した論文が、東北大学大学院教育学研究科研究年報(第72集第2号)に掲載されましたので、その概要を紹介させていただきます。論文は同研究科の安保英勇准教授との共著です。題名は「生徒指導の理念にもとづいた相談方法の検討と実践事例分析ー自己指導力と自己決定を重視した面接構成に注目して」というもので、簡単に言いますと「生徒指導としての面接の仕方」を理論的に考察し援助方法として妥当であるのか論じた内容です。

前半の【研究1】では最初に、従来から指摘されている「生徒指導」という用語の「多義性」について整理しました。その上で、生徒指導の基本原則を歴史的な観点から振り返り、自己指導力の獲得に重要な「自己決定」に注目した面接の仕方についてあらためて提案しました。「あらためて」といいますのは、このような面接の仕方は、ガイダンス導入期の昭和24年に公刊された手引書「中学校・高等学校の生徒指導」(文部省)に記されていますし、また令和4年「生徒指導提要」の「ガイダンスとカウンセリング」にも記載されているガイダンスとしての面接の仕方であるからです。結論として、本論文で提案する「生徒指導の理念にもとづく生徒指導としての面接方法」は、子どもたちの成長発達のみならず問題解決という側面においても、個別の援助方法として十分に合理的であり有効であるものと考えられました。

また、後半の【研究2】では生徒指導実践力のある先生方11名を対象にインタビューを行い、提供された面接事例を修正版GTA(Modified Grounded Theory Approach)という手法で分析しました。その結果、生徒指導実践力のある先生が行う面接の仕方には、日頃の信頼関係にもとづく受容共感的なかわりの中に、子どもたちの主体的な意思を尊重した「選択」を話し合いながら促すという手続きが含まれていることが確認されました。すなわち、「自己決定の場の提供」という要素が含まれていることがわかったことで、提案する面接の仕方は十分に学校の教育機能としての役割を担い得るものと考えられました。以上の【研究1】【研究2】をふまえて、最後に「まとめ」として仮説的な「面接の進め方」を示しました。

「生徒指導提要」の記述とは裏腹に、教育相談は長らく生徒指導とは独立・対立した教育活動として捉えられてきた経緯があります。私自身も平成の初期に、長期研修で学んだロジャースの技法を主とする教育相談実践の在り方と、学校現場の現実である厳しい「生徒指導」とのはざまに悩みが尽きなかったのを覚えています。悩んだ末に相談した専門家の先生からは「教育相談なんてやめた方がいいですよ。やればやるほど教師としての評価は下がりますよ」と諭されました。今回の研究論文は、そのような「原点」から始まった、先生方が日常の教育活動として行える「教育機能足り得る方法」について提案したものです。

新規会員紹介



令和5年度新会員 古川川東中学校 三浦 忍

令和5年度に入会させていただきました三浦 忍と申します。学校教育においては、生徒に対して常に共感する姿勢を持ち、寄り添った指導をしていきたいと考え、そのためにはカウンセリングマインドを持つことが必要不可欠と考え、カウンセリングについて具体的に学んでみたいと思い、入会させていただきました。現在は、特別支援自閉・情緒障害学級の担任をさせていただいております。とにかく寄り添った指導を心掛けてはいるものの、なかなか思うように行かず試行錯誤している毎日です。特別支援教諭免許状には「自閉・情緒」という項目はありません。そんな時に、カウンセリングを含めた心理学が非常に役に立つのです。放送大学で心理学を学んでいます。今年度、北海道の教員採用試験に合格させていただきましたので、あとわずかで宮城県を離れますが、どうぞよろしくお願い致します。

「子供たちの未来作り」

令和5年度新会員 月立小学校 熊谷 賢一

日本学校教育相談学会に入会したきっかけは、子供たちの抱える問題の複雑化と、それを支援する側の必要性を感じたからです。近年、子供を取り巻く環境は大きく変化し、いじめ、不登校、家庭環境の問題など、子供たちが抱える問題は複雑化しています。特に、地方では都市部に比べて相談機関や専門職の人材が不足しており、支援の充実に課題を感じていました。そこで、より専門的な知識やスキルを身に付けるために、日本学校教育相談学会への入会を決めました。学会では、最新の研究成果や実践事例を学ぶことができるだけでなく、様々な分野の専門家の皆様と交流することで、多様な視点を得られると期待しています。子どもたちの健やかな成長を支援するためには、支援者自身が学び続け、自己研鑽を積むことが不可欠です。今回の入会は、そのための第一歩であり、子どもたちの未来に貢献するための新たな一歩です。

「SC と大学院生」

令和6年度新会員 玉野井 ゆかり

講師を含めて34年間の中学校教員を令和6年3月に退職し、SCとしての勤務をスタートさせました。初めての小学校勤務に戸惑うことも多く、可愛い児童や児童のより良い成長のために指導にまい進する先生方、子どもをいつくしみ愛情をたっぷり注いできた保護者の力になるためにSCとしてどうあるべきかと思う日々です。教員時代、思春期真っただ中の中学生や、その子どもにどのように接したらいいか悩む保護者の対応にずいぶん当たってきたつもりでしたが、小学校の児童となるとまた別です。よりよいカウンセリングのためにSCとして学び続けることの必要性を実感しています。

週1回SC勤務をしながら、残りの4日間大学院で学んでいます。大学院では23歳から70歳まで幅広い年代の方たちとの触れ合いに刺激を受けています。相談活動にも生かせるよう学修に励みたいと思います。



令和6年度新会員 岡 智恵子

6月に入会させていただいた岡智恵子と申します。私は現在、岩沼市の子ども福祉課で相談員をしています。以前は宮城県の公立小学校の教員でした。また東北福祉大学通信制大学院で中村恵子先生のご指導のもと、不登校に関する研究を行っております。その学修の中で、中村先生から日本学校教育相談学会のことを伺い、入会させて頂きました。

宮城県支部の会員の中には教員時代にお世話になった先生方もいらっしゃって、大変嬉しく思っております。また8月の研修会では、修士論文の中間発表会を兼ね、事例をお話しさせて頂きました。その際先生方から頂いたご指導やご助言を道しるべに、修士論文を完成させることができました。

現在私は相談員として不登校をはじめ、ぐ犯や児童虐待等のケースを担当しております。そのような児童の家庭は、根本的な問題として発達障害や二次障害として精神疾患を抱える場合が多いと痛感しています。今後も児童福祉の仕事に生かせるように、学会員の皆様と一緒に勉強させて頂きたいと思いますので、どうぞよろしくお願い致します。

私は教員を定年退職し、東北福祉大学通信制大学院にて、中村恵子先生の下で学んでおります。在職中、不登校コーディネーターとして別室登校やチーム支援の在り方に悩み、試行錯誤しておりました。そんなとき、恵子先生の著書に出会い、衝撃を受け大変助けられたことが現在の学びのきっかけになっています。昨年度、恵子先生の勧めで、11月の新井肇先生の研修会「教職員のメンタルヘルスと燃え尽きる前に支え合う職場づくり」に参加いたしました。教職員のバーンアウトの背景や教職員が支え合う学校風土づくりは、私の研究テーマに関連する部分が多く、大変勉強になりました。今年度は研究・事例発表会で多くの先生方とお知り合いになり、発表に対するご意見やご感想をいただき、研究の励みとなりました。貴重な学びの機会を得て深く感謝しております。

宮城支部活動状況・事務局より

1 令和6年度の宮城県支部の活動報告

1 支部第22回総会

令和6年5月11日(土) 13:30～(会場:東北福祉大学国見キャンパス)

2 役員会(定例会)

○第1回理事会・会計監査

令和6年4月29日(月) 16:00～(会場:東北福祉大学仙台駅東口キャンパス)

○学校カウンセラー宮城県支部推薦委員会

申請者がいなかったため開催なし

○第2回理事会

令和7年3月2日(日) 14:30～(会場:東北福祉大学東口キャンパス)

3 事務局

○令和6年度会員名簿発行

4 各専門委員会

I 各専門委員会打合せ 令和6年5月11日(土)総会終了後(会場:東北福祉大学国見キャンパス)

II 各専門委員会活動

○研修委員会

①第52回研修会(令和6年8月31日(土)13:30～(会場:東北福祉大学仙台駅東口キャンパス))

②第53回研修会(令和6年11月30日(土)9:30～(会場:東北福祉大学仙台駅東口キャンパス))

③研究発表会(令和6年8月31日(土)9:50～ (会場:東北福祉大学仙台駅東口キャンパス))

○広報委員会

・支部会報19号の発行(石巻ブロック)

・支部会報20号の発行準備(仙台ブロック)

○紀要作成委員会

・紀要第9号の発行予定(令和7年5月)

5 各ブロック(仙台ブロック) ブロック会議・研修会

令和7年1月11日(土)

(大崎ブロック) ブロック研修会

令和6年11月9日(土)

(大河原ブロック) ブロック研修会

令和7年2月15日(土)

(石巻ブロック) ブロック総会

令和6年6月22日(土)

6 学校カウンセラー部会

○第7回総会・研修会の開催(令和6年11月9日(土)13:30～(会場:東北福祉大学国見キャンパス))

2 日本学校教育相談学会宮城県支部第52回・53回研修会

1 第52回研修会

○期 日 令和6年8月31日(土)13:30～

○会 場 東北福祉大学仙台駅東口キャンパス

○内 容 『学級担任・教育相談担当者が知っておきたい WISC-V の基礎知識～子供の何が分かって、どう授業・指導に生かせるのか～』

○講 師 坂本 條樹 先生(共立女子大学家政学部児童学科 講師、渋谷区教育委員会 特別支援教育係 心理士)

2 第53回研修会

○期 日 令和6年11月30日(土)9:30～

○会 場 東北福祉大学仙台駅東口キャンパス

○内 容 『日本の学校教育は、どのように設計されているか～アメリカの学校教育およびスクールカウンセリングと対照して～』

○講 師 高原 晋一 先生(名古屋市経営アドバイザー、Ph.D.)

※1、2の研修会ともハイブリッド(集合型&オンライン)で開催

3 日本学校教育相談学会宮城県支部令和6年度研究・事例発表会

○期 日 令和6年8月31日(土)9:50～

○会 場 東北福祉大学仙台駅東口キャンパス

① 岡 智恵子先生(東北福祉大学通信制大学院中村恵子先生研究室)

「小学校の校内支援室における発達障害児の社会性獲得プロセス」

② 菅原 由美先生(東北福祉大学通信制大学院中村恵子先生研究室)

「年度途中で休職した担任の学級を引き継ぐ教員はどのような役割を担うのか」



<編集後記>

宮城支部設立20周年という節目の年を迎え、ここに「きずな第19号」を発行できますことを大変嬉しく思います。「きずな」の編集を通じて、20年という長きにわたり活動されてこられたことは、改めて先生方の御尽力と熱意の賜物であると感じました。

お忙しい中、原稿をお寄せいただきました皆様に心より御礼申し上げます。

石巻ブロック 高橋 憂季実

